

# 末黒野

すぐるの

5月号（通巻849号）



# 河鳥

小川 玉泉

(名譽主宰)

清滝の早瀬や潜く河鳥

清滝の早瀬や潜く河鳥  
紅白を競ひ丈余のしだれ梅  
難波江の釘煮に春の香りかな  
いかなごの釘煮と届く灘の酒  
元の使者祀る碑梅香る  
日に向かひ喇叭捧ぐる黄水仙

掲句は平成二年から同十一年にかけて、毎年有志による二泊三日の吟行会に、一足早く清滝から保津峡を訪れた時の作である。清滝川は流れも速く、芭蕉の「清滝や波に散り込む青松葉」をうべないながら、河鳥の素早い動きを注視したものである。当時の歳時記には採用されていないが春の部に入ったので目の見えた。

# 冴返る

立春と書く便箋の白さかな  
埠頭まで鉄路光りて冴返る  
春月の光芒硬し湖の上  
梅東風の崖をすたとんと基地の海  
諸葛菜岬のバスは客一人  
池の面に風の道あり柳の芽  
骨董屋の抜身一振冴返る  
動く影動かぬ影を春の水  
触れ合へる一枝もあらず梅真白  
鎌倉の二川三川うらけし  
裏返す鉢を零れて土匂ふ  
手話の指踊り遅日の姉いもと

松本三千夫

# 冴返る

青白き外灯の径冴返る  
梅三分枝寄せ合うで光満つ  
白梅の道や風生む人力車  
一輪に一輪の風梅真白  
紅梅や山を越えゆく雲ひとつ  
水音の山かけ下り藪椿  
握手せる子の手の大き芽吹山  
啓蟄といふ新しき土の色  
暖かや通り抜けられさうな路地  
石庭の石の座りのうららけし  
橋渡る人の影ある朧かな  
せせらぎの光に咲くや花辛夷

黒滝志麻子

(副主宰)

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 冬うらら

安齋久英

あぎとへる鯉や眠れる山を背に  
みぞるるや峡の白波総立ちに  
稜線に茜溶かるる冬うらら  
安房を背に白帆行き交ひ冬夕焼  
冬晴れや笛吹く鳶と追ふ鳶と  
吊革に託する寒の拳かな  
海峡をゆるりと巨船枯木星  
浮雲の相寄り分かれ日脚伸び  
世に疎く人にも疎し鬼遣らふ  
母の忌や彼の日の如く雪降り

## 寒

## 鴉

石黒興平

まづ丸太据ゑたる手斧始かな  
耳立てて北風遣り過ぐす寒立馬  
黎明の寒月ひかり失はず  
夕映えの空に溶け込み寒鴉  
糶声のいよよ高まり息白し  
顔出すは思はぬところ鴉  
鳴声のこもる牛舎や春を待つ  
鋤先の土の黒ぐる春來たる  
わけも無く心昂ぶる野焼かな  
鉛筆を耳に春野の測量士



春  
寒

田中臥石

遺書などはなし澎湃と枯蓮田  
日帰りの旅や鮫鱈鍋囲み  
安達太良の遠嶺暮れたり紅椿  
寒椿電話黒滝志麻子の声  
潮寄する波止場集まる鱻釣  
晚酌の肴よ寒の釣り鱈  
魚籠重し鱈に混じる舌鰯  
春寒の殊にならひの海の音  
漁師より盃に背黒鰯受く  
紅白の梅花吹き寄す停留所

寒  
星

森清堯

阿夫利嶺のからりと晴れて冬菜畑  
冬菫芭蕉の句碑と日を分かち  
寒星のひとつ明るく弟逝きぬ  
大寒や力を込むる足の五指  
次いで逝く末弟義兄寒昂  
園丁の紫煙のとどく龍の玉  
やはらかく弾む雀や春隣  
夕笹子篁を背の能舞台  
近道を行けばぬかるみ春隣  
句点打つ度の頬杖春愁

# 夕時雨

森清信子

鑿跡の冴ゆる洞窟灯のほのか  
参道のゆるるき石段寒雀  
オルゴールの螺子巻く音や霜の夜  
岸壁の野積みコンテナ冬鷗  
白障子話せぬ兄に語り掛け  
教会の扉の重し夕時雨  
枯菊の紫紺の焰久女の忌  
日当りの堤のほぐれ冬堇  
待春やポケット多き旅靴  
健やかな眠りたつぷり春立つ日



# 乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



菰 卷 菅野日出子

下仁田の葱のあまさや鍋奉行  
天保と読める祠や餅供ふ  
着せ藁を透くる薄ら日寒牡丹  
柗の花香しき夕間暮  
堂裏の片減り箒松の明け  
手鞠麩を椀に二三個女正月  
怪獣のごと菰卷の大蘇鉄

日脚伸ぶ 加藤静江

病 窓 斉藤マキ子

大祖堂千畳敷の寒極む  
松過ぎや凜冽として勅使門  
托鉢や寒を素足の列長し  
拭き上ぐる百間廊下日脚伸ぶ  
凍雲や裂けて海面へ日矢とどき  
早咲きの梅やふくらむ絵馬の数  
仁王像へあいさつの児等うらけし

病む夫の髭剃る窓や春の雪  
芝庭の斑雪啄む雀かな  
病室の壁に縞なす春日かな  
見舞道日々に色濃き春の草  
春愁や己励ます紅をさし  
病窓に春月巡りきたりけり  
病床に人恋ふ夫の日永かな

いぬふぐり

堺

昌子

ざわざわわ

今村千年

紅白の梅の香さそふ里曲道  
をり紙の二羽のにはとり松七日  
いぬふぐり空の青さを重ねをり  
鳥声や風のままなる竹の秋  
冬ざれや休耕田の草そよぎ  
好日の小流れの音草萌ゆる  
加賀の白枝から枝へつぐみ飛び

笹子

吉田きみえ

露の臺

岡田史女

靄晴れて杉百幹の余寒かな  
水光り溪の笹子の啼き止まず  
春光をからめて暗し杉木立  
寒梅や逢はねば人に忘らるる  
春立つや背山へ鳶の急降下  
白梅の散り敷き寺の百羅漢  
水仙に午後の日あふれ庭の昼

脱衣場の換気口より寒に入る  
足裏より忍び込みたり寒四郎  
ざわざわわと八重の潮風甘庶刈  
さしば舞ひ日はシナ海に沈みけり  
探梅や遙かに光る伊豆の海  
曾我墓所も御殿場線も梅のなか  
梅が香や斜陽ゆかりの寓居跡  
てのひらの乾ききつたり霜柱  
角巻の母の香りをまとひけり  
朝日さすや涵養林の冬木の芽  
低き山連なる里や寒椿  
大寒と思へり椅子に深くゐて  
なだらかにひらく野面や露の臺  
うすらひの光弾ける杖の先

# 青炎集

## 松本三千夫選



横須賀

大川 暉 美

横浜

正谷 民 夫

寒禽の声の澄みゆく谷戸の朝  
**烟隅や朝霜残る鎌の先**

鳴く牛の大きな声や春隣

畑返す黒々と土生き生きと

干し終へて紙ほど軽き若布かな

早春の風と乗り込む旅のバス

柏

溯 田 則 子

横浜

椎 名 文 子

寒の水飲み干し決意新たにす

来し道を帰りは迷ひ冬日差

雪煙の時に炎や日の落ちて

風花やたいこ橋行き本殿へ

**ドローン飛ぶ芝焼く煙かすめつつ**

迷惑メール削除削除や二月尽

南に低き日輪懸大根

処方箋の薬よく効く十二月

杉の秀を越えぬ高さに冬至の日

**冬天のあやふきほどの蒼さかな**

待春の三日月高く出でしかな

想ひ人に匂ひとどけよ花の兄

物忘れ笑ひ収めむ冬の賜

**面一本女子も混じりて初稽古**

一行の筆文字覚ゆ師の賀状

大寒や文字の掠るるボールペン

単線の自動改札春浅し

下萌や野末にかしぐ石仏

雲水の足の速さや山崎湯美篤

**堂冴ゆる迫力の目の雲龍図**

白梅の枝先水漬き風荒び

老幹の太き添木や梅香る

海光を纏ひまぶしき海苔の鎮

黒々と干せる若布や潮の香

横 浜

横

浜

小流れの音軽やかに寒紅梅

ぶつぶつと泡吹く真夜や寒蜩

句座帰り寒満月を一人占め

**海に向く藩士の墓や藪椿**

春立てり渚に鳥の足の形

浜日和若布乾びる音はじけ

横須賀

福田 禎子

冬風や標高低き城ヶ島

**水仙と松を競はせ城ヶ島**

水平線に沈む冬日や城ヶ島

凍て土の花壇に咲けり紅の薔薇

マフラーに埋れてをりぬ子の笑顔

箸置に作る梅が枝花一輪

田

村

加

代

川ひとつ渡り矢切の葱畑

逆光の眩しき川面都鳥

亀鳴くや女の寿命延びつつき

江戸川に残る渡しや水温む

**大磯に今も一庵西行忌**

春風や臙脂の房の弓袋

川 崎

平

澤

侃

横 浜

細 島 孝子

**吾輩と言ふ程も無しうかれ猫**

長崎の鐘の鳴りたり春の旅

地震後の大きな迂回残る雪

阿蘇くじゆう墨絵の如き春の霜

旅土産届けに両手路の臺

売家の客なかなかや春二番

寒紅をさす華やぎの少しあり

**自分史となりて冬日の句帳かな**

鴨の背に鴨の乗りつつ餌を欲る

身の丈に適ふ暮しや青木の実

力強き喜の字の文字の賀状かな

良き風に国旗はためく初御空

# 耕 土 集

## 黒滝志麻子選

目の前のこの札だけは歌留多取  
フーズドライ形ばかりの七日粥  
対岸に並ぶ島の灯冴ゆるかな  
短日の帰路を急ぐや漁の船  
風神を味方の童いかのぼり

横浜 平木三恵子

一山に薬師堂あり枯れ深む  
走り根の狭間つたひや霜柱  
初場所や期待力士の晴れ姿  
どの子にも光のあふれ春立つ日  
長屋門くぐり古木の梅満開

塩川 君子

薄水や脳の輪切りを見てをりぬ  
春疾風待ち会ふ時を狂はせり  
病床の点滴とれぬ浅き春  
地を這うて空を突き抜け猫の恋  
沈黙のキリスト揚げ絵踏かな

浦安 東 正則

八十五年良くぞ生きたり年新た  
始発駅氷の光るバスの窓  
砂利白く乾きて広し冬の川  
梅咲くや楽園の紅灰か  
亀鳴くや甲骨文として残る

中村 弘

我が庭の径一尺の水面鏡  
塩鱈の塩分うまし酒うまし  
庭凍る朝の散歩を取り止めに  
寒椿の蕊の味知る何の鳥  
大粒の雪舞ふ下界見下して

横浜 小長谷 紘

老人ホームの鰯の料理や柔らかし  
嬉野の湯や湯豆腐のところがと  
朝靄やつと小綬鶏の横切りて  
レストランの彩のタッセル春めけり  
春の森数の増えたる十竜塚

土岐 政嗣